

## 「哲学はあるのか？」という問いは何を意味するのか？

周縁に定位した哲学に向けた論点整理

中野裕考(お茶の水女子大学)

河野哲也(立教大学)

王青(中国社会科学院)

長野邦彦(東京大学)

中江兆民『一年有半』の「我日本古より今に至る迄哲学無し」との発言が答えようとしていた問題に、今改めて答えるのではなく、むしろその存立基盤の方に目を向けてみたい。そしてその手がかりとして、20世紀アフリカ、中南米、中国、日本その他で似たようなパターンの議論がなされてきたという事実の意味を考えてみたい。

じっさい中江兆民の答えが正しかったかどうかにかかわらず、彼が答えようとした問題は、日本特有のものではない。アフリカで Placide Tempels, *La philosophie bantous* (1945)が、中南米で Miguel Leon Portilla, *La filosofia nahuatl* (1956)が引き起こした賛否両論の議論は、類似の問題意識が各地にあったことを示している。

現状認識としては次のように言えるのではないか。「哲学有り」「哲学無し」と性急に答えを出す段階はすでに終わっているし、そもそも答えを出すことが求められていたわけでもない。むしろ問いそのものから解放される必要があるはずなのだが、現時点では、それが達成されたとはまだ言えない。なぜなら、その問いを動機づけていた諸条件がまだ存続しているからである。この諸条件を特定し、どのようにすればそれを解体できるかを考えるために、上記の諸地域を並べる意味がある。

20世紀アフリカと同中南米では、個別的な相違はもちろん多々あれ、大枠において類似の議論が展開されてきた。中国や日本ではそこまで明示的に議論の応酬が繰り返されたわけではなかったかもしれない。けれども潜在的には同様の自問自答があったはずで、それゆえにアフリカや中南米の議論の個々の論点が既視感を引き起こすのである。

まず、この地に西洋哲学とは異なるオリジナルな哲学があったか(あるのか)と問われる。この問いが何か重大な真実を突いているかのように受け止められ、白熱した論争や感情の高ぶりを喚起してしまうという点に、上記諸地域の特性がある。問いそのものが切迫したものと受け止められるからこそ、人はそれに性急に答えを与えようしてしまうのである。

ワークショップの枠内で紹介されるが、アフリカや中南米の議論状況から窺えるように、「哲学有り」という答えによっても「哲学無し」という答えによっても、この地の人々は満たされない。その一因は、この文脈において「哲学」という言葉にさまざまな意味、のみならず願望や期待のようなものが込められていることにある。

常識的な理解に従えば、「哲学」とは古代ギリシアで生まれ、ソクラテス、プラトン、アリストテレスによって精密化されて以降、基本的には西洋世界で受け継がれ発展してきた学問を指している。その学問が、近代に入って全世界が西洋化されるに伴って、アフリカ、中南米、アジアのような地域にまで伝播し学ばれるようになったのである。だからごく常識的に考えれば、西洋以外の地域にオリジナルな哲学は無い。

ところが上記諸地域においては、このような常識的な答えはさまざまな問題を喚起してきた。「哲学無し」と答えた中江兆民もまた、決して単に事実を確認していたのではなく、むしろそれ以上の挑発や論争喚起の意味を含めて、あえて強すぎる断定を行ったのだった。「哲学」には、それがなければ一流とは認められないもの、まともな国ならあって当然のもの、といったニュアンスが暗黙のうちに込められている。このことは、近代の国民国家体制の産物だとも言える。

ともあれ、「哲学無し」あるいは「哲学は無いのではないか？」と問題提起されると、これらの地の住人たちはどうしても、「いや、有る」と答えたく

なってしまうがちであった。しかしそのためには、上記のような常識的な説明を疑ったり修正したりしなければならない。

西洋近代の合理的体系的な学問だけが哲学なわけではない、哲学は神話や宗教、詩や文学、そして政治運動などと厳密には区別されないしその必要もない、論理的に展開される論文を書かなくても、さらには書き言葉がなくても、対話による、口承伝統による哲学はありえる、等々。個々の論点は非常に重要だし、行き詰まりがささやかれている「哲学」に、改めて豊かな内実を与えるためのヒントにもなりうる。実際に、西洋の外に位置する上記の諸地域における今後の哲学のあり方を構想していく際には、改めて検討していかなければならない諸問題でもある。

また、そう考えてみれば、西洋哲学史の中にもこれらの論点に対応する例が少なからず見出されるのも事実である。パルメデスやエンペドクレスの詩的表現、本を書かずに対話に徹したソクラテス、常に信仰を旨としていたアウグスティヌスやキルケゴール、近代における各種感情の哲学、非合理なものを取り込むニーチェのアフォリズム、等々が、上の諸地域にも「哲学」があったというための論拠として挙げられたりしてきたのだった。つまり、西洋でも「哲学」はかくも多様であったのだから、我々の地域の伝統も「哲学」と呼ばれてよいはずだ、というわけである。

とはいえこのような仕方では、議論が前進することはなかった。既出の論拠に基づいた反論や再反論の応酬が水掛け論の様相を呈するようになるにつれ、議論そのものを敬遠する傾向が進んだ。しかしそれは、上述のように問題が解決したことも、問題を動機づけていた諸条件から人々が解放されたことも意味しない。むしろ逆に、当初の素朴な問題意識を動機づけていた諸条件がいつそう強化されつつあるようにさえ思われるのである。

じっさい、上記の諸地域では、その地固有の哲学の形態をめぐる議論が下火になった代わりに、西洋哲学を西洋人が行っているのと同様のスタイルで研究するという傾向が強まっているように見受けられる。西洋にあるものを輸入するだけではダメなのではないか、という意識が出发点だったことを思えば、議論が一巡して元の地点に戻ったとも言える。

別の角度から、次のように指摘する立場もある。グローバル化が進んだ現在では、西洋哲学研究の細分化した各専門分野の最先端に、世界中の研究者たちが従事するようになっている。西洋以外の地域に暮らしているかどうかは問題にならない。グローバルな舞台上で対等に議論し渡り合えばよい。中江兆民的な気負いにはもはや意味はない。今、このような立場がむしろ大勢を占めつつあるようにも思われる。

けれども、この立場は強すぎる断定を含んでいる。そのことは、この立場を表明する人々自身が、実はたいい中江兆民的な気負いを共有してしまっているところにも表れている。この立場はなぜ強すぎるのか。それは、この立場が、西洋哲学だけから成るわけではないその地の文化状況を哲学研究に反映させられていないという事実を無視してしまっている、あるいは反映させる必要などないと言い直してしまっているからである。その地の文化伝統を哲学に接続する必要などない、とは少なくとも自明な答えではない。そう断定する前に、それでよいのか？と問い、検討する必要のある大きな問題である。西洋の哲学者たちは、絶えずその地の伝統に立ち返りつつ西洋哲学を研究している。西洋の哲学者と同じように西洋哲学を研究する、西洋の外に生まれ育った哲学者たちには、それができていない。この状況は、やはり問うに値する問題を含んでいる。「哲学はあったか」という問題が、問うべき事柄を適切に表わしていなかったのだとすれば、どのように問いを立てるべきだったのか。問題を動機づけていた諸条件から解放されるためには、まずはその諸条件を特定する必要がある。本ワークショップでは、そのための第一歩として、アフリカ、中南米、中国、日本に見られた議論の同型性は何を意味するのか、という問題に取り組んでみたい。